The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	鹿子木員信のインド追放とその影響
Author(s)	橋本, 順光
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/27380
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

鹿子木員信のインド追放とその影響

橋本順光

はじめに　間諜に監視されてのインド行

タゴールを敬愛し、来日の際には通訳も務めた平和運動家の髙良とみは、戦前のインド旅行を回顧して以下のように述べている。

> その頃[20 世紀前半]の大英帝国の印度支配はガッチリしていて、日本から行く旅行者はあらゆる旅行者同様に、スパイに尾行されて一言一行を報告されて時にはひどい目に逢った。タゴールに招かれてビルマ境に入ろうとした横山大観画伯や鹿子木博士などもそうであった[1]。

たしかに大観の自伝には該当する記述がある。岡倉天心の勧めにしたがい、ガンジス河とビルマに挟まれたティペラ王国の宮殿へ装飾を施すため、1903 年に大観は菱田春草と共にインドに向かった。しかし、待ち受けていたのは「王国の使者ではなく、英国の官憲」だったというのである[2]。

ただ、ここには誇張もあったようだ。台湾総督府に勤めていた鎌田正威は、世界漫遊を報告した 1927 年の講演で「印度に行った者は、たいていは探偵を付けられると云うように聞いて居りました」と前置きして、このように述べている。親友の「高雄州知事の高橋親吉」が、

> 友人鹿子木と云う人の失敗体験談をして、印度は非常に言葉が難かしい。印度に行くならば何も疑を受けぬようにせよと云う注意を受けたのでありますが、行って見ますと探偵も何も付いて居ない。至る処英国政府の厚い友誼を受けたのであります[3]。

と、実際とは異なる歓待ぶりに拍子抜けしたというのである。

監視の実際のところはともかく、ともに言及されている鹿子木という人物に注意したい。インドに行くとなると、しばしば引き合いにだされたこの男、鹿子木員信という特異な哲学者である。というのも哲学にとどまらない幅広い分野で活躍し、世界を飛び回りながら波瀾万丈ともいえる人生を送ったからである。そんな鹿子木の生涯と軌跡は、宮本盛太郎の研究がもっとも詳しい。それによれば鹿子木は、1884 年に生まれて、海軍機関学校を卒業し、日露戦争に従軍するものの、戦後、海軍をやめてしまう。それから京都帝国大学で哲学を学び、渡米してニューヨークのユニオン神学校を卒業、コロンビア大学ではニーチェについて修士論文を提出している。このとき鹿子木は、彼を追ってアメリカへ渡って来た女性と当地で死別しており、それは徳富蘆花の『みみずのたはごと』所収の「梅一輪」(1913)のモデルとなった。アメリカで鹿子木は本格的にドイツ哲学を学ぶことを決意し、ドイツに渡ってイェーナ大学でルドルフ・オイケンのもとで学び、博士号を取得している。博士論文の提出に際して骨を折ってくれたコルネリアとは、それが縁で結婚する。こうして 1914 年に帰国し、慶應義塾大学哲学科教授に着任した[4]。『永遠の戦』(1915)、

1　髙良とみ「インドの独立」, 著作集第 7 巻『使命を果たして：1955-92』(ドメス出版, 2002), p.100.
2　『大観自伝』(講談社, 1951) , p.53.
3　鎌田正威「亜細亜から欧米へ」, 『台湾時報』1927 年 9 月号, p.66.
4　宮本盛太郎『宗教的人間の政治思想－安部磯雄と鹿子木員信の場合』(木鐸社, 1984), pp.68-77.

『戦闘的人生観』(1917)などを発表した一方で、『アルペン行』(1914)という著作もあるのは、鹿子木が登山とスキーをとりわけ好んだからである。その『アルペン行』を愛読していた槇有恒たち学生に乞われ、1915 年には慶應義塾山岳会を設立し、多くの登山家を育てた[5]。インドへ向かったのは、1918 年 4 月、哲学研究のためだった。3 年の予定だったが、しかし、1919 年 2 月 21 日の深夜、世話になっていたカルカッタ三井物産の社宅で、突如、英国の警察に拘禁され、国外へ追放されてしまう。インドの独立運動を幇助し、扇動しようとした容疑を問われてのことである。

帰国後の鹿子木は、『ガンヂと真理の把持』(1922)で英国の帝国主義を批判し、アジア主義を鼓吹し、『やまとこころと独乙精神』(1931)などでドイツのナチズムにも接近、さらに『日本精神の哲学』(1931)や『すめらみくにの理論と信念』(1936)などで国粋主義を展開することになる。こうした鹿子木の遍歴とファシズムへの接近については、すでに詳細な研究がある[6]。しかし、鹿子木の追放事件により、英国政府が日本のアジア主義とその諜報活動について警戒心を一層強めるにいたったというポプルウェルの指摘については、その後、十分な検討がなされてこなかった[7]。冒頭の二つの引用からも明らかなように、鹿子木の国外追放は、日本のインド旅行者にとって大きな影響を及ぼした。ここでは、これまで照合されることのなかった日英の文書を参照することで、鹿子木事件の余波を探りたい。

鹿子木によるインド追放録

インドを追放され、1919 年 3 月に帰国したあと、鹿子木は 4 月 13 日に大隈重信邸で開かれた時局研究会にて「印度追放新嘉坡監禁」と題した講演を行っている。その記録は、『維新公論』の 1942 年 2 月号で初めて公表されたが、現在のところ、この講演がもっとも詳しく鹿子木のインド滞在と追放の経緯について記されている。それに従って、以下、鹿子木の足跡を再構成してみたい。

まずインドへ渡った目的は、ヒマラヤとインド哲学の魅力ゆえだという。そしてインド行きに際しては山好きである細川護立侯爵に支援してもらったことを語っている[8]。1918 年の春に出発したインドへの旅は、中途はさして問題なかったが、ボンベイでインドに初めて上陸の際、自分だけパスポートを 2―3 日取り上げられ、足止めを食ったという。そのとき、おそらく写真を複製して手配するためであろうと気づいた鹿子木は、旅程を予め申請し、その通り行うことを心がけたと語っている。なお、ボンベイでは、ちょうど公開されていた「有名なベサント夫人の自治演説」を聞きにいっている[9]。アニー・ベザントは神智学協会の代表だが、もともとアイルランドの自治運動家であり、境遇を同じくするインドでも同様の運動を行っており、当局からはかねてから、要注意人物としてにらまれていた。鹿子木の行動は英国官憲の警戒心を強めるのに十分だったと思われる。

それからカルカッタに向かい、ベンガル人のチベット学者で故サラット・チャンドラ・ダスの息子に会っている。サラット・チャンドラ・ダスは、河口慧海の『西蔵旅行記』(1904)にも記されているとおり、有名な英国のエージェントであるのだが[10]、鹿子木はどうやら知らなかったようである。彼の息子はカルカッタ控訴院で弁護士をしているといい、その息子に頼んでダージリンの家を借り、そこで五ヶ月滞在し、

---

5 槇有恒『わたしの山旅』(岩波書店, 1968), p.21.

6 葉照子「鹿子木員信における日本精神とナチズム」, 望田幸男編著『近代日本とドイツ』(ミネルヴァ書房, 2007)など。

7 Richard J. Popplewell, *Intelligence and Imperial Defence: British Intelligence and the Defence of the Indian Empire, 1904-1924* (London: Frank Cass , 1995), p.282. ただし、書籍の性格上、鹿子木自身についてはそれ以上の言及はない。また宮本盛太郎「鹿子木員信の「インド体験」」, 『人文』,(29), 1983, 55-78 は『維新公論』の鹿子木の講演を発掘し、槇有恒『わたしの山旅』に言及するなど先駆的研究ではあるが、論の性格上、鹿子木事件の後代の影響については言及していない。

8 鹿子木員信「印度追放新嘉坡監禁」『維新公論』, 1942 年 2 月号, pp.30.

9 鹿子木員信「印度追放新嘉坡監禁」『維新公論』, 1942 年 2 月号, p.31.

10 Derek Waller, *The Pundits: British Exploration of Tibet & Central Asia* (Lexington: The University Press of Kentucky , 1990), pp.193-208.

そのうち三週間をヒマラヤ行に費やしたのである。

そのときのことは、山岳記の古典として斯界では有名な『ヒマラヤ行』(1920)に詳しい。そのあとがきで鹿子木は、「プラトンの心は即ちヒマラヤの姿である」[11]と述べる一方で、ダージリンからカンチェンジュンガへ登山を同伴したベンガル出身の「D」が、実は密偵だったと苦々しく述べている。鹿子木によれば、「彼は僕がさる日本の友より紹介されて頼って行った唯一人の印度の友であった以上、金銭の為めに、その友を売ったー而かも虚構の事実の上に、その友を売ったー背信者であった」という[12]。1918 年の 8 月初めのダージリンにて、鹿子木はカルカッタに帰る D に友人への手紙の手渡しを依頼した。すると、あとになってわかったことだが、D はそれを開封し、警察に密告したというのである。そして、この自称「自治主義者」である「D はカルカッタ控訴院の弁護士」とも述べている[13]。先の「印度追放新嘉坡監禁」の記述と照らし合わせれば、おそらく D はサラット・チャンドラ・ダスの息子だったと考えられよう。

こうして 11 月の下旬、登山を終えた鹿子木は、まずダージリンへ、そしてカルカッタへと戻ってくる。「印度追放新嘉坡監禁」によれば、長くチベットで軍人として働き、日本へ帰るところの矢島保治郎と、偶然、カルカッタで会ったという[14]。このとき鹿子木は三井物産の社宅で暮らしていた。そこには建築史家の関野貞が同宿しており、仏蹟巡礼を行うというので、一緒に出かけたという。鹿子木は、このときの記録を『仏蹟巡礼行』(1920)として刊行している。それによれば 1919 年 1 月 4 日、関野と共にカルカッタを出発したとあり、『関野貞日記』にも同じ記述がある。ちなみに関野は、鹿子木との仏蹟巡礼を遍路姿の二人として、巧みな戯画で描いている[15]。巡礼とはいっても、鹿子木もいうようにアルジャンという「老練な印度人の家来」が面倒をみてくれるので、いわば「大名巡礼」であった[16]。

しかし、関野とは 1919 年の 2 月 5 日にカーンプルで別れ、鹿子木は、ブッダのゆかりの地を訪ねる旅をそこで切り上げてしまう。再び、カルカッタに帰り、南インドに向かおうとしたためである。理由は、今回のインド行の目的の一つでもあった革命家オーロビンド・ゴーシュと面会を果たすためだった[17]。ただ、鹿子木はそれまでにも何度か友人や周囲のインド人にその希望を漏らしたところ、思いとどまるよう何度も言われて、断念したという。オーロビンド・ゴーシュは 1908 年のベンガル独立運動の中心人物であり、そのため英国に追われ、フランス領インドのポンディシェリーに逃げ込んだまま、いわば軟禁状態にあった。鹿子木は革命運動よりも、「日頃近来彼の公にする哲学的文学的論文を極めて興味深きものを覚えた」からと記しているが[18]、インド独立運動に対する当時の英国の警戒を考えれば、まず無謀といってもよい試みだったろう。

こうしてカルカッタの三井物産の社宅に戻っていたところ、鹿子木は 2 月 21 日の真夜中に拘禁される。手紙はいうにおよばず、書類から草稿から紙の類はみな没収されたという。そのため鹿子木は『仏蹟巡礼行』を、その序文で断っているように、記憶を頼って苦労して書き上げなければならないことになる。そうして同夜、鹿子木は着の身着のまま拘禁され、即時、インドシナ汽船会社のナムサン号で追放された。『ヒマラヤ行』では、そのことを「南無三宝してやられたりカルカッタ　CID の夜嵐のあと（CID とは印度に於て刑事局の略称)」と戯れ歌にして詠んでいるが、そのあとのシンガポールでの 9 日間に及ぶ虐待にも似た監禁では、ろくに水も食事も与えられず、日の光もほとんど見ることもなくと、相当に苦しんだと記

---

11 鹿子木員信『ヒマラヤ行』(政教社, 1920), あとがき, p.5.
12 鹿子木『ヒマラヤ行』, あとがき p.8.
13鹿子木『ヒマラヤ行』p.44.
14 鹿子木員信「印度追放新嘉坡監禁」『維新公論』, 1942 年 2 月号, p.32.
15 『関野貞日記』(中央公論美術出版 , 2009), p.387.
16 鹿子木員信『仏蹟巡礼行』(大鐙閣, 1920), p.12.
17 鹿子木員信「印度追放新嘉坡監禁」『維新公論』, 1942 年 2 月号, p.34.
18 鹿子木員信「余は何故に印度を追放されしか」『大観』, 1919 年 6 月号 , p.91. なおこの雑誌の主幹は、日印協会の成立に関わった大隈重信である。おそらく大隈邸での「印度追放新嘉坡監禁」をふまえての依頼だったと思われる。

している。ようやく出獄できたのは3月12日のことである[19]。

シンガポールで解放されて帰国して後、1919年4月早々に、鹿子木は、外務省を通じて英国に抗議を行った。すると、1920年正月に「印度革命運動者」の証拠を示した「逆襲的回答」があり、鹿子木が三澤赳に宛てた手紙とその返信の写真を見せられたという[20]。ただ鹿子木によれば、「僕平生の持論である革命的教育」に立脚してインドの教育を論じた精神論に過ぎず、それが「暴力的革命陰謀の宣伝者」[21]と曲解されたのだと反論している。

鹿子木事件とその反響

こうした鹿子木の嫌疑を示した英国による「逆襲的回答」について、いまのところ英国の国立公文書館やインド省図書館で該当する文書は見つけられていない。そのため、鹿子木がインド独立運動を扇動するために送り込まれたのかどうかについては、依然として不明というしかない。ただ重要なのは時期である。1915年、ラス・ビハリ・ボースなどのインド人革命家が日本へ亡命したが、日本政府は彼らを引き渡すことなく、頭山満らアジア主義者たちは彼らを匿った。それに対して英国は、日本政府に抗議すると同時に内偵調査を行っている。たとえば早稲田大学で教鞭ととっていた高名なインド学者のハリ・プラサード・シャーストリー教授は、エージェント‘P’として雇われており、ボースはじめアジア主義の影響力と危険性について詳細に報告していた[22]。そんな情報ゆえにインドの独立を支援するアジア主義周辺に対して、一挙手一投足に英国が疑心暗鬼たらざるをえなかったときに、鹿子木の事件が起きたのである。在日インド人亡命者とアジア主義者の動向や連携に神経をとがらせる英国にとって、恐れていた日本からの密使がついに現れたと思っても不思議ではない。

かといって、鹿子木がインド独立運動の密命を帯びていたとは、現段階の調査結果を見る限り、なかなか考えにくい。『ヒマラヤ行』の献辞に明らかなように、たしかに鹿子木はインド行の資金を細川護立から受けている。そして鹿子木が、赤倉にある細川護立の山荘で、スキーや登山のあとで秩父宮にアジア開放の大義を説き、「ガンジーヲ中心トセル印度ノ現状ニ始マリタルガ、次デ朝鮮統治ノ問題ニモ入リ、思想問題ニモ及ブ、約二時間余」と、滔々と熱弁をふるったことも、つとに知られているとおりだ。しかし、こうしたアジア主義運動をめぐるネットワークに鹿子木が積極的に関与したのは、帰国後のことである[23]。実際、鹿子木の行動はあまりに不用意かつ無防備である。オーロビンド・ゴーシュといった英国にとっての要注意人物に秘密裡に会おうとするのではなく、公然と周囲に希望を意漏らすところ、サラット・チャ

---

19 鹿子木員信『ヒマラヤ行』(政教社, 1920), p.11.

20 この三澤については不詳。加藤哲郎の「情報戦のなかの「亡命」知識人――国崎定洞から崎村茂樹まで」『インテリジェンス 』誌第9号（2007）によれば、1948年頃、同名の「アメリカ間諜」が中国にいたそうだが、おそらく別人だろう。なお鹿子木の兄彦三郎のご遺族である員義氏のブログには、大阪府立第十一中学校に勤めていた三澤赳の紹介があり、教育論を宛てたところからみて、この人物である可能性が極めて高い。http://kanokogi.asablo.jp/blog/cat/misawa/ を参照。実際、Public Record Office, FO 262 1419に収録されたインド省局長から東京の英国大使に宛てた極秘書簡には、鹿子木から没収した書類として「大阪のミサワ宛の書簡」が挙がっている。このブログには、彦三郎が1918年から翌年にかけて行った洋行の日記『欧米漫遊日誌』(1920)が掲載されており、それによれば1919年5月30日というから、員信がインドから帰国して一か月ほどのこと、弟員信がインドで世話になった「広田氏」にポートサードで面会したという記述がある。http://kanokogi.asablo.jp/blog/cat/hiko2007/?offset=20 を参照。

21 鹿子木員信『ヒマラヤ行』,p.14.

22 Popplewell, *Intelligence and Imperial Defence* , pp.278-279. シャストリは、1921年に自殺に追い込まれた東京外国語学校インド語講師アタルと異なり、エージェントである疑いをまったくかけられないまま日本を離れて上海へ移ったようである。たとえば上海で「ミラード・レビュー」誌に投稿した「日本に於ける民本主義の将来」は、『亜細亜時論』の1919年3月号に訳載されている。なお、鹿子木は、『東亜之光』誌16巻9号(1921)に「理想主義的印度と世界革命」を寄稿し、アタルの死を悼み、その遺言を引用しながら、「世界革命の要件としての印度革命」(『東方時論』1919年12月号）以来の反英的な世界革命論を展開している。同誌pp.1-8を参照。

23 保阪正康『秩父宮と昭和天皇』(文藝春秋, 1989), p.120で引く『秩父宮御側誌日誌』.

ンドラ・ダスといった有名な英国協力者のことを知らず、その息子に接触したところと、そんな点から考えてもおよそ計画だっての行為とは思われない。たしかにどこまで関与しようとしたのかは不明ながら、いくつかの状況証拠からみて、インドは独立すべきだという持論を、不用意なほどしばしば周囲に説いていたことだけは確かなようである。鹿子木の帰国後、山岳会の槇が経緯を以下のように説明している。

> まず、私たち弟子共は、その非をイギリス大使館に訴えた。すると暫くして、先生の罪状なりとて、先生がインドから故国へ送った数々の手紙の写真を示された。その手紙の内容は、すべてイギリスのインド統治を非難し、インド独立を叫ぶ激しい言葉に満ちていた。カンチェンジュンガに向ったとき随行したリエーゾン・オフィサーに、旅行中一徹な先生はインドの独立を説いたのであったが、この若者は官憲のスパイであって、山から帰ると同時に好ましからざる人物として逮捕されたのである。証拠を突き付けられて私たちは一言もなく引き下ったのであった[24]。

このように当時の社会情勢を考えれば無謀と思えるほど、インド独立論を吹聴していたことについては、久琢磨の回顧からもうかがえる。1918 年の夏、久は神戸高商の海外研修でラングーンへ向かったが[25]、その時、日程に余裕があり、三井物産の「栗山謙三」の斡旋でダージリンに向かったという[26]。英国が没収した書簡によれば、鹿子木は、先の「大阪のミサワ」宛の手紙を「カルカッタのクリヤマ」に届けてもらうよう依頼しているので、このクリヤマはおそらく三井物産の栗山建三かと思われる[27]。そのように親交があったせいだろう、久は、栗山から紹介状をもってダージリンで「山麓に独居し印度哲学の研究をしている」鹿子木を訪ねたという。そのターガーヒルは案内人なしには到着できないほどの山の上だったらしい。苦労して訪れると、鹿子木は「印度人の友人四・五人を呼んで」この栗山の若い友人を歓迎し、久は「大いに印度自治論を聞かされた」というのである[28]。こうした間接的な記録では、鹿子木がカルカッタで会ったというチベット帰りの矢島の方にも残っている。残念ながら典拠が不明なのだが、矢島によれば、鹿子木はインドの独立運動推進のためにやってきており、チベットで軍人として働いていた矢島の快挙を褒めそやし、帰国の資金に不自由しているのを知ると、餞別を集めて矢島に贈ったという[29]。

インド独立運動を支援する隠れ蓑として目を付けられた三井物産についても付言しておこう。その‘managing directors’の一人オダガキ(Odagaki)というから、常務取締役の小田柿捨次郎だろうか、彼が1920 年 2 月 2 日にインド政府役人からのインタビューで鹿子木事件について証言している。小田柿の言を信じるなら、鹿子木の手紙を、それが英国の利益に反することを知りながら、日本へ送り届けた社員がいたこと、カルカッタ支店が鹿子木に資金供与していたことは事実だという[30]。社員名については言及されていないが、おそらく栗山のことと見て差し支えはあるまい。

興味深いのは、事件後、インドから英国外務省へ送られた鹿子木についての報告である。鹿子木が『東方時論』の 1919 年 12 月号に寄稿した「世界革命の要件としての印度革命」に言及して、

> いまや鹿子木は本性を露わにした。インドでは静かな哲学者のふりをしていたが、いまやはっきり革命を望み、インド人にも続いて革命するよう求めている。こうした考えがいつ鹿子木の頭に生ま

---

24 槇有恒『わたしの山旅』p.23.

25 このときの久の視察は、『大正七年夏期　海外旅行調査報告』(神戸高等商業学校:1919 年), pp.89-102 に「英領印度報告　蘭貢米調査」として収録されている。むろん、ダージリン行や鹿子木については触れられていない。

26 久琢磨「私の軍隊時代」『琢磨会会報』第 40 号(1997)。http://www.asahi-net.or.jp/~de6s-umi/jtkm0740.htm　を参照。

27 Public Record Office, FO 262 1419, 通し番号 293。

28 久琢磨「印度・ビルマへの旅」『琢磨会会報』第 39 号(1997)。http://www.asahi-net.or.jp/~de6s-umi/jtkm0739.htm を参照。

29 浅田晃彦『世界無銭旅行者　矢島保治郎』(筑摩書房, 1986), p.188.

30 Public Record Office, KV 3 251, ‘Mitsui Bussan Kaisha’, p.3.

れたのかは興味のあるところだが、この記事は、彼の悪事に対して抱いた我々の意見を十分に正当化するように思える[31]。

と、国外退去が正しかったことを追認しているからである。なるほど、これはいわば啐啄同時であったのかもしれない。しかし、扇動を予防したといえると同時に、鹿子木を強制送還することによって、そのインド革命論を公然と叫ばせる事態を引き起こしてしまったともいえるだろう。いずれにせよ、鹿子木の「世界革命の要件としての印度革命」は、全文が英訳されて外務省に送られ[32]、以降、英国政府は日本人のインド旅行者に対して厳しく眼を光らせることになる。

たとえば 1922 年 12 月 12 日付けで、長崎県知事が内務・外務大臣に宛てた「印度官憲ノ日本人取締状態ニ関スル件」では、視察帰りの技師から聞いた談話として、「過般鹿子木博士ノ「カルカッタ」」のように密偵を放って日本人に注意することが甚だしく、インドでは「全政庁内ニ日本情報部ヲ特設」し日本語が堪能な人員を雇用しているとある[33]。これはあくまで談話であり、参考意見としての報告にすぎないが、鹿子木事件以降、こうした談話が噂話のように広まっていったことは重要だろう。インドに関して英国が諜報活動を行い、圧力をかけているということが知られるようになった結果、さまざまな邪推や疑心暗鬼が生まれたといえるだろう。実際、読売新聞では 1920 年 11 月 17 日付けの段階で、インドで独立運動の煽動を疑われ、強制送還された鹿子木員信が慶応を辞職しているのと、アイルランド出身でインドから慶応に招かれたジェイムズ・カズンズと、両者が慶応を去ったのは「某国政府からの圧力」ではないかと英国の関与を示唆したのだった[34]。

日本人インド旅行者への監視の常態化

1920 年代は、一次大戦の終結と好景気により洋行が一般化し、同時に仏蹟巡礼も盛んになった。そして鹿子木事件以降、日本人旅行者はインドで監視されているらしいということは、旅行者自身にも認識されるようになっていった。鹿子木の『ヒマラヤ行』は山岳文学の古典となったが、その『仏蹟巡礼行』もまたインドを巡る人々に多く読まれた。両者におさめられた鹿子木の密偵と拘禁の事件は、それにともなって広く知られるようになったのである。

実際、数多くのインド旅行記に『仏蹟巡礼行』や鹿子木の追放事件は登場している。その点で関精拙の『天竺行脚』(1922) は示唆に富む。ここでは鹿子木が『仏蹟巡礼行』で「老練」な下僕と記した「案内者兼ボーイのアルジャン」が河口慧海、高楠順次郎、関野貞、關精拙をみな案内したとして登場しているからである。これはそれだけガイドが信頼されているのか、それだけ日本人旅行者が監視しやすくなっているのか、おそらく両方のことがいえるだろう。実際、三角佐一郎の回顧によれば、鹿子木の追放に触れながら、日本からインドを訪れたものには「みんなスパイがついていて」言動を監視されたこと、そしてカルカッタの日本商品館の現地採用スタッフについて「全員ある意味では、イギリス政府のスパイだったかもしれない」と述べている[35]。同時代の書籍で、はっきりと警告を述べているが、藤田義亮の『仏蹟巡礼』

---

31 Public Record Office, FO 371 5350, 'Appendix to Secret Abstract for January and February, 1920. List of Suspected Persons.'

32 Public Record Office, FO 371 4557

33 アジア歴史資料センター, レファレンスコード B03050969800, B-1-6-3-063(所蔵館：外務省外交史料館), 各国内政関係雑纂／英領印度ノ部 第五巻

34 宮本盛太郎『宗教的人間の政治思想』p.151 によれば、「日本及日本人」の 826 号（1922 年 1 月発行）にも同様の記述があるという。

35 三角佐一郎ほか『回想の日印関係』(東京外国語大学地域社会先端教育研究センター「史資料ハブ地域文化研究拠点」研究叢書, 2008), p. 66 および鹿子木事件 p.52, pp.92-94 を参照。企画を立案され、この有益な資料をご教示かつご恵贈いただいた藤井毅氏に心から感謝したい。

(1927)である。藤田はヒマラヤ観光でダージリンからカルカッタまで、密偵につきまとわれた不愉快な経験を記し、

> 印度人だと思うて英政府の悪口を云うたり、革命運動の賛成話でもしようものなら、「怪しき日本人」若しくば要観察人」として報告する、孟買やカルカッタの警察には日本の草書で書いた文章や手紙をサッサと判読する高等刑事が居る相である、だからウッカリ旅行先から日本内地へ向け平穏ならざる文章等を通信する事は最も危険である、殊に旅行者の内でも軍人系や本願寺系の者に対しては一層眼が光るのである[36]。

と忠告している。この手紙の件は鹿子木事件そのものであり、また五年前の「印度官憲ノ日本人取締状態ニ関スル件」で報告された談話が噂として広まっているかのような印象を与えよう。この藤田の友人である成瀬賢秀も『印度遊記』(1928)のなかで、警察署長がいつも自分の到着を事前に知っていることや、何事もまえもって用意してくれる案内人の「ラル」に感嘆していたのだが、旅の途中で、これは単に「ラル」が密偵であることに気づいている。それどころか警察といっしょになって、「巡査を俄作りのボーイに仕立てて監視」させたことに気づき、「道理でボーイが素人臭く下手であった」と納得している[37]。こうした例は、河口慧海から鹿子木までを世話した「アルジャン」のような老練な案内人と見分けをつかなくさせると同時に、旅行者を疑心暗鬼にさせたであろうことは想像に難くない。

事実、1930年代に入ると、日本人のインド旅行記のなかで、藤田が苦言を述べたような密偵や案内人というのはなかなか登場しなくなってくる。それを裏付ける外交資料はいまのところ眼にしてはいないが、こうした警戒心が日本人旅行者に共有されていったことをふまえ、監視に関して何らかの工夫や洗練が施されたのかもしれない。インドへ「行って見ますと探偵も何も付いて居ない」と快適なことを喜んだ鎌田正威は、1927年と藤田や成瀬と同時代の経験だが、それだけ監視が巧妙になったのか、あるいは事前の調査で危険人物でないとみなされたか、その両方を考えなければならないだろう。

そうした点で示唆に富むのは野口米次郎の例である。彼は1935年から翌年にかけてインドへ講演旅行を行った。インドへ渡るにあたって、野口もまたこれまでの旅行者と同じことを言われたようだ。ガンディーとの会見で、野口は以下のように述べている。

> 私はいった、『賀川[豊彦]君の言葉によるとイギリス官憲は彼の印度入りを許さないそうだ....私も日本を去る時、イギリスの探偵が煩いから用心せよといわれた。しかし私はそれらしいものをまだ見ない。』
>
> メタ君[侍医]は側からいった、『あなたにすぐそれと感じられるようでは探偵の役が勤まりますまい....どこに何がいるか知れませんよ。』ガンヂイの寝台を取り巻いている人々はどっと笑った[38]。

野口は、日英同盟の批判だけでなく、インドからカズンズを招聘するなど、英国政府の要注意人物であったので、まったく調査や諜報活動がなかったとはおよそ考えられない。それに鹿子木事件を考えれば想像がつくように、そもそも「戦前は彼[ガンディー]の周辺に行っただけでスパイ扱いされて逮捕されてしま

---

36 藤田義亮『仏蹟巡礼』(内外出版, 1927), pp.242-243. この本願寺系というのは大谷光瑞による探検を英国は諜報活動ととらえていたからである。詳しくは白須淨眞『大谷探検隊研究の新たな地平ーアジア広域調査活動と外務省外交記録』(勉誠出版, 2012)ほかを参照。

37 成瀬賢秀『印度遊記』(中西書房, 1928), p.179.

38 野口米次郎『印度は語る』(第一書房, 1936), p.177.

う」状況だった[39]。「どこに何がいるか」わからないというのは、おそらく当時の実情を示す言葉であろう。これはあくまで「危険人物」同士の会談という特殊な事例だが、多かれ少なかれ1930年代から40年代のインド旅行者にもあてはまることなのかもしれない[40]。

それだけ監視と諜報が洗練すれば、疑心暗鬼もいっそう深刻にならざるをえないということになる。当の鹿子木自身が、まさにそうであった。1941 年、日印協会がカマーラデーヴィー[Kamaladevi Chattopadhyay]の講演会を開いた際、彼女がインドの独立運動の事情を話し始めてしばらくしたところで、当時、大日本言論報告会の専務理事だった鹿子木がやおら立ち上がり、「この女は米英のスパイである。この話はさせてはいけない。今すぐ止めなさい。弁士中止」と叫んだという[41]。そのときの会場の困惑と混乱を記憶している三角は、鹿子木にも一理あるとして、彼の拘束事件を挙げている。そして三角によれば、そのとき、カマーラデーヴィーの通訳をつとめていたのが、冒頭で鹿子木事件への言及を引用した高良とみである。

おわりに　鹿子木事件とショー事件

以上のように、もっぱらアジア主義や国家主義の立場から注目される鹿子木員信ではあるが、彼のインド追放は、その後の日本人インド旅行者に大きな影響を与えた。1919年という、日本のアジア主義者がインド人革命家をかくまい、日英同盟の存続が見直されているなか、日本からの旅行者と商社が独立運動を支援していた可能性があるというのは、ポプルウェルもいうように「堪忍袋の緒を切るに十分な出来事」だったといえる。そもそも第一次世界大戦中において、英国は日本のインドへの干渉を警戒し、あたかも譲歩するかのように日本の朝鮮半島支配を黙認するかのようにふるまうところがあった。たとえばそれは、日英同盟堅持のために宣伝要員として雇われたロバートソン・スコットのプロパガンダにも、しばしば登場する主張である。その『日本、英国及び世界 ： 親愛なる日本人諸君に告ぐ』(1916)というパンフレットのなかで、スコットは英国人がはじめてインドをまともに統治できたように、日本人には朝鮮半島と台湾があることを強調する。その一方で、日本のインドの独立支援については、交換条件であるかのように手厳しく批判しているのである[42]。

その点で示唆に富むのは、鹿子木事件から約一年後の1920年の7月、朝鮮半島の独立運動を支援した嫌疑で逮捕されたジョージ・L・ショーのことである[43]。ショーは、アイルランド系の英国籍商人だったが、朝鮮半島の安東で逮捕され、その処遇をめぐって英国政府は強く日本政府に抗議した。それを受けて、まさにスコットの対比を逆用するかのように、鹿子木事件に言及して英国政府に反論したのが、黒龍会の英文雑誌『エイジアン・レヴュー』である。一時、カズンズも編集に関与していたこの雑誌の社説は、鹿子木という「無実の紳士」を拘禁し、反論の場も与えず裁判もなく強制送還した英国政府を批判した。そして英国のインドでの対応と、日本の朝鮮半島での対応を対比したのである[44]。なお、この社説の約七ヶ月前、1920年3月9日付けの書簡で満川亀太郎は、「例のエシアン・レヴューの一件ですが、鹿子木君は学

---

39 三角佐一郎ほか『回想の日印関係』p.84.　この点については堀まどかの『「二重国籍」詩人　野口米次郎』(名古屋大学出版会, 2012)も、三角を引いて注意を喚起している。同書 pp.366-7, p.547 注 122 を参照。

40 このインド行にて、野口はカズンズと再会している。野口米次郎『印度は語る』, p.281. カズンズが勤めるマダナパール大学へ誘われたが行けなかったため、訪問してくれたカズンズについて、「カズンズとは十年振りで相見て微笑し無言のうちに久闊を叙し合う。赭顔白頭例に依って例の如し」と、なにかをはばかってか、それ以上会話の内容について記載はない。

41 三角佐一郎ほか『回想の日印関係』pp.95-98.

42 Mari Nakami, 'J. W. Robertson-Scott and his Japanese Friends', pp.166-179 in Ian Nish (ed.), *Britain & Japan: Biographical Portraits*, vol.2 (London: Japan Library, 1997), p.173.

43 小田実の小説『河』(2008)にまで登場するショーについては、英国の外交文書にも多くの記事が残っており、多国籍な家族の問題も含めて、詳しい分析は他日を期したい。

44 *Asian Review*, vol.1 no.7 (1920, October), pp.694-695.

者になるのだからとの理由で引受けませぬ」と、大川周明に宛てて相談をもちかけている[45]。これが鹿子木への参加呼びかけだったのかどうかはともかく、この社説はいみじくも日英同盟の転機を象徴しているのかもしれない。それでは実際にショー事件は鹿子木事件と関連づけられたのかどうかについては、鹿子木事件をめぐる英国の外務省文書の分析とあわせて今後の課題としたい。

これまで見てきたように、鹿子木がインド革命の扇動を組織的かつ計画的に行おうとしていたという文書は見つかっていない。したがって、藤田が警告したように、鹿子木は「印度人だと思うて英政府の悪口を云うたり、革命運動の賛成話」を不用意にもちかけたにすぎないという可能性も、依然として残されている。確実にいえることは、鹿子木事件以降、日本のアジア主義が岡倉を起源として警戒され、日本人インド旅行者および滞在者に対する調査と観察がほぼ常態化したことである。そして、それは当の日本人たちにも共有されるようになっていった。ヒマラヤ行と仏蹟巡礼の記録は、その後、インドへ赴く日本の旅行者にとって一つの手本を提供したが、両者が記録する密偵の経験談もまた、諜報を意識させたという点で同じくらい大きな影響を及ぼしたのである。

[45] 長谷川雄一・今津敏晃・クリストファー・W・A・スピルマン（編）『満川亀太郎書簡集―北一輝・大川周明・西田税らの書簡』（論創社, 2012）, p.19.